

吉蔵の西方浄土往生論

——無量寿觀と無所得人懺悔——

伊 東 昌 彦

問題の所在

吉蔵は弥陀を因縁相即の本迹二身に開き、より根本的な本身の弥陀を想定し、西方浄土の弥陀を迹身として位置づけている⁽¹⁾。この本身とその派生としての迹身は、共に非本非迹で無名相の中道法身を悟らせるための教として、敢えて二身に開かれたものである⁽²⁾。しかし、このような弥陀仏身觀において、三福や十六觀は実践行としてどのような意義を持たされているのであろうか。吉蔵は本迹二身から法身を悟ることを言うが、これらはあくまでも往生の因行であり、法身を悟ることといかに関連づけられるのかは問題である。

一 滅罪の構造

三福と十六觀の關係は諸師により論ぜられているが、吉蔵は三福を一切善とし、これに十六觀も含まれているとする。三福は一切の善行を分別した世間凡夫善・小乘善・大乘善を

言い、十六觀はこの中の大乘善の一つとして考えられているのである⁽³⁾。世間凡夫善と小乘善は、往生して弥陀の説法に値い大乘に入るための善行であるとされ、大乘の修善ではないが入大のための縁とされている⁽⁴⁾。

大乘善については、十六觀中において、仏身を觀すれば往生して無生法忍の得られることが示されている。『觀經』では、觀想により滅罪がなされたならば、その結果として西方浄土への往生が確約されるという説き方がなされているのである。しかし、吉蔵は觀想と滅罪の關係について、懺悔もせず、なぜ觀想によつて滅罪されるのかということを問題としている。すなわち、吉蔵は十六觀を無量寿觀（第一く第十三觀）と九輩觀（第十四く第十六觀）に分けるうち、無量寿觀において、西方浄土の依報を觀することは、

只依不_レ異_レ正正不_レ異_レ依。依正不_レ正正依不_レ依。依正不_レ依正_レ識_レ依正_レ即識_レ不依正_レ。識_レ假則識_レ中。若爾豈不_レ滅罪_レ耶。所以文云。依_レ此觀_レ時則得_レ無生法忍_レ。何意得_レ無生法忍_レ。以下

識「依正不依正」識「假悟」中故。得「無生法忍」也。若但作「琉璃地觀」見「好淨地」則生「貪心」。以「觀」地不地「故得」滅罪」。(『大正』卷三十七、二四二下—二四三上)

であると述べる。依報と正報の両報が説かれるが、依報は正報に異ならず、正報は依報に異ならない。正報は依報による依が正(依正)なので、これは独存的・絶対的に正報なのではない。依報も正報による正が依(正依)なので、これも独存的・絶対的に依報なのではない。したがって、このように依正両報を識る(識依正)ことは、すなわち独存的・絶対的な依正両報ではないと識る(識不依正)ことであり、これを言い換えれば、依正両報を仮有だと識る(識仮)ことは、つまりは依正即不依正の中道を悟る(悟中)ことになる。だから、『観経』にはこの観想によって無生法忍を得ることが説かれるのであり、ただ依正両報を好淨と見るだけでは貪心を生ずるだけだが、地即不地と観することによって滅罪されると言うのである。

吉蔵の言う観想とは、このように依正両報が不二でありながらの両報であると観することであり、一を得て固定視をするということのない無所得の立場による。正報である仏身についても、

無量身身相不可思議。像猶若「處空」不「可」作。(『大正』卷三十七、二四三下)

吉蔵の西方淨土往生論(伊 東)

と述べるのであり、仏身ではあっても、それはちょうど虚空のごとくであり、固定的な実体のない不可作なものだと言う。そして、様々な仏身の異なりがあることについては、

只心即是佛。只佛即是心。此心若成法身則成。法身既成應身即成。故心是三十二相是即是佛也。(中略)然復有「佛身相」遍滿「虚空」。所有徒衆亦遍滿「虚空」。所「以有」如「此不同」者。皆為「適」緣所「見」故也。作「此觀」者得「無生忍」者。今觀「佛身相好」云何得「無生法忍」耶。前已釋。(『大正』卷三十七、二四四上—中)

と述べるのであり、法身であれ応身であれ、仏身は全て心に即して成るからだと解釈している。「心即是佛」・「佛即是心」なのであるから、弥陀や観音勢至を唯一身とみなし、これに妄執し貪心を起こしてはならない。仏の身相は全て適縁の所見であり、『観経』はこの観想によって無生法忍の得られることを説くが、それは前の解釈と同じこと、すなわち仏身においては、仏身の仮有を識り無名相の中道法身を悟ることによるのだと言うことになる。吉蔵の考える滅罪とは、形式的な懺悔の行によってなされると言うよりも、その構造としては、このような「識仮悟中」ということに帰せられるものである。

二 吉蔵における懺悔

『観経疏』には懺悔行の必要性は説かれないのだが、吉蔵

の言う懺悔とは、そもそもこのような有所得から無所得への転換を内容とするものである。『中觀論疏』卷八本には、

六時之間常欲懺悔滅罪業者此為二錯誤一。故今明。諸業本不生。何所滅耶。作此悟者罪自清淨也。今習無所得人懺悔懺悔。所以爾者。有所得人見罪生而懺悔。如是懺悔是破實相罪。今知業本不生今亦不滅懺有所得懺悔罪也。〔大正〕卷四十二、一二二上—中）

と述べられており、諸業の不生不滅を悟らず、生じた罪をただ滅しようとする有所得懺悔は錯誤をなす。罪を自から清淨ならしめようとするならば、諸業の不生不滅を悟る無所得人懺悔を習すべきだと言う。また、『金剛般若疏』卷一にも、

一切凡夫未得道者皆由有所依著。波若正破衆生有所依著。故說無依著之法。波若是真實懺悔故。諸大乘經辨真實懺悔皆依般若。如普賢經云。一切業障海皆從妄想生。若欲懺悔者端坐念實相。〔大正〕卷三十三、八六下）

と言うように、真實懺悔とは波若の無依著の法であることが示されている。『觀普賢菩薩行法經』によれば、一切の業障は妄想より生じたものであり、これを懺悔しようとするならば、端坐して実相を念すべきであると説かれていっていると言う。

生じた罪業を滅しようと懺悔をするものの、それは自らの妄想によつて積み重なるものであるから、妄想を破すこと以外に罪業を滅することはできない。滅すべき罪業が生じた

見ること自体、顛倒心であり有所得心である。『觀普賢菩薩行法經』には、

如是法相不生不滅。何者是罪。何者是福。我心自空。罪福無主。一切法如是。無住無壞。如是懺悔。觀心無心。法不住法中。諸法解脫滅諦寂靜。如是想者名大懺悔。名莊嚴懺悔。名無罪相懺悔。名破壞心識。〔大正〕卷九、三九二下—三九三上）

とも説かれており、吉蔵の言う懺悔とは、畢竟、このような無罪相懺悔と共通するものである。したがつて、無所得人懺悔とは、罪福に何か主体となるものがあると妄執する有所得心を破し、一切法は何ら主体のない、不生不滅・無住無壞であることを悟ることなのである。そうであるならば、吉蔵の示す無量壽觀のあり方は、無所得人懺悔そのものなわけであり、吉蔵は懺悔の行為なしで滅罪されることを認めるのだが、無所得に根差した觀法というのが、そもそも真實の懺悔であるとされていると言えるわけである。

三 十六觀の意義

吉蔵は以上のように滅罪の成立過程を考えており、觀想によつて仮有を識り中道を悟るということ、得無生法忍という所説によつて証明している。ただし、無生法忍を得るから滅罪されると言うのであれば、經典の所説と次第が異なる。

つまり、『観経』では観想↓滅罪↓往生↓得無生法忍と説かれる次第が、吉蔵においては、観想↓得無生法忍↓滅罪↓往生という次第に大胆に組み替えられているわけである。

吉蔵は無生法忍を十六観の成就その時の得果であるとしているのであり、吉蔵の考える実践行において、浄土往生という結果は第一義的ではない。すなわち、十六観成就の結果が浄土往生であるはずなのだが、十六観の実践こそが無自性空の実践なわけであり、それ以上でもそれ以下でもない。十六観の目的は、吉蔵においては無名相の中道法身を悟ることに他ならず、西方浄土の依正両報を境界とすることによる無得正観の実現だと言えるのである。そうであるから、浄土往生はあくまでも副次的な結果に過ぎないということになるわけである。

小結

吉蔵の浄土教観の最大の特徴は、往生に関わる問題を中心とはしないことであり、因行を修して西方浄土へ往生するという教説によつて、自らが現世で何を証得するのかということが論じられている。つまり、十六観は念仏三昧であり、その結果次第では往生も当然に可能ではあるのだが、天台の常行三昧のような止観行としての側面が強調されているのである。だから、自から弥陀本願による衆生済度には論点が向け

られなくなるのであり、『観経疏』においては、本願力への言及はほぼなしと言える様相となっているのである。

1 吉蔵は『観経疏』において「法藏菩薩有^二本迹^一二門^一」（『大正』卷三十七、二三五上）とし、弥陀を本身と迹身の二身に開いて解釈する。

2 『観経疏』の冒頭、序王第一において、吉蔵は法身について「法身虚玄非^二名相之形^一」（『大正』卷三十七、二三三中）であることを示し、本や迹などという名相については、「有^二本迹之稱^一存^二淨穢之教^一。此是隨緣之意應物之門」（同上）であると云う。なお、『法華玄論』巻九や『華嚴遊意』も参照のこと。

3 三福について、「所^三以明^二此三福善^一。此三種攝^二一切^一盡何者初一是世間凡夫善。第二是小乘善。第三是大乘善」（『大正』卷三十七、二四一下）と述べることに、十六観について、「今言^レ觀者為^二是何物觀^一耶。解云今此觀者非^二前大小觀^一。乃是後大乘中生滅無生滅觀耶」と述べることによる。

4 『観経疏』において「以^二菩提心^一為^二業主^一餘善為^レ縁」と言われるが、より明確には、『勝鬘宝窟』卷中之本において「取^二人天二乘遠為^一菩提心縁^一。籍^二人天二乘^一值^二佛菩薩^一發^二菩提心^一。然後方入^二一乘^一作佛」（『大正』卷三十七、四二上）と述べられている。

5 『大正』巻九、三九三中を参照。

（キーワード） 吉蔵、『観無量寿経義疏』、十六観、滅罪、無所得人懺悔

（東洋大学大学院）

the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa juan 29*, because there are issues on interpretation of (1) the treatise on two bodies of the Buddha and of (2) the *Mahāprajñāpāramitopadeśa*. After due consideration of these two issues, I believe that the concept of the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa 29* is closest to the treatise on two bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu*.

10. Jizang's Theory of Rebirth in Sukhāvātī: Wuliangshou visualization and the repentance of one beyond acquisition

Masahiko Itō

This study tries to clarify the Sanlun (三論) scholar Jizang's thought regarding Pure Land ideas. In particular it considers the Wuliangshou visualization (無量壽觀), and clarifies its relation to the repentance of the individual beyond the idea of acquisition (無所得人懺悔).

11. The Judgment of the Buddha-kāya of Amitābha in the Chapter on the Three Buddha Bodies in the *Dacheng fayuan yilin zhang*

Kana HAYASHI

We find in the chapter of Buddha's land (Fotu zhang 仏土章) in Ji's 基 *Dacheng fayuan yilin zhang* 『大乘法苑義林章』 his discussion of the body and land of the Buddha Amitābha. Here it is stated that Amitābha's pure land combines the saṃbhoga-kāya and nirmāṇa-kāya lands. However, in the chapter on buddha-kāya, Sanshen yilin 三身義林 in the same work, there is a description which emphasizes that Amitābha is saṃbhoga-kāya, this opinion being justified by many scriptural citations. Especially Ji's interpretations of the *Guyinsheng jing* 『鼓音聲經』 and the *Guanyin shouji jing* 『觀音授記經』 are unique and original. Ji did not accept the theory of Pure Land Buddhism (Jingtujiao 淨土教) that ordinary people (*fanfu* 凡夫) would be able to be born in a saṃbhoga-kāya's land only by invocation of Amitābha. But I